

研究部ニュース 2022年度第3号

2023年3月1日(水)

発行者：研究部

平素は本校の教育及び研究活動にご協力いただきありがとうございます。1月から始まった3学期もまもなく終了です。研究活動も順調に進めてきました。

研究大会(1年次)について



全校研究主題「知的障害特別支援学校における教育課程の編成と評価の一体化」とし、令和4年12月26日にオンラインで研究大会(1年次)を実施しました。全国から47名の先生方に参加していただきました。本校からの基調報告に対する指導助言を本学特別支援教育部門の今枝史雄先生からいただき、研究大会の最後は、文部科学省 初等中等教育局 特別支援教育課 特別支援教育調査官 加藤宏昭先生から「知的障害特別支援学校における教育課程に基づいた指導と評価の一体化に向けて」と題するご講演を賜った。大会後のアンケートでは、感想や質問を多数いただき、次年度の研究につながる大会となりました。



研究大会当日の様子

ユニット研究について

本校教員と大学教員との連携研究である11の「ユニット研究」は、特別支援教育の今日的課題に対応した内容の授業実践・実験研究などを網羅して取り組みを行っています。今年度実施されたユニット研究の内容を紹介します。

1. 知的障害特別支援学校高等部における横断型STEAM教育の実践的研究
◎岩崎弘 ○森久美子/指導助言者 石川聡子(大阪教育大学 理数科教育部門)/研究協力者 Andrew Gung(ケニス株式会社)

今までSTEAM教育の取り組みの報告はされているが、それらの多くの報告は、小学校や中学校、高等学校での取り組みが多く、特別支援学校での取り組みはほとんど報告がされていない現状である。そこで、本研究は、知的障害特別支援学校高等部において「未来の自動車」をテーマとした理科と総合の授業だけではなく、国語の授業にて教科書「国語☆☆☆☆」(文部科学省)の題材「自動車の今昔」を中心としたSTEAM教育プログラムを開発して実践を行った。その結果、教員による評価において、Four Csの資質向上に付け加えて理解力と熱心さ・意欲の6項目中5項目において実施前の数値より高かっただけでなく、目標値を超えることができていた。さらにコミュニケーションや生徒の理解力、熱心さ・意欲において高評価を示すことができただけでなく、試行錯誤・判断的思考や熱心さ・意欲を伸ばすことができる実践となった。

2. 応用行動分析学に基づく知的障害のある子どもへの読み指導

◎白樫麻紀 ○西川裕子 池村憂美 的場早紀

指導助言者 野田 航(大阪教育大学 大学院連合教職実践研究科)

行動分析学は行動と環境との相互作用という視点で子どもを観察し、より効果的な指導方法を検討しつづける理論からなっている。知的障害があると読みの習得に困難が生じやすいことが予測されるため、より効果的な方法で学ぶことが求

められる。しかし個別性の高さや学びにくさがあるため学校現場では読み指導を「いつ、何を、どのように」行えばよいのかを判断することが難しい。行動分析学における刺激等価性という枠組みや文節単位読み手続きを使った読み指導について先行研究を調べたところ、指導の前提としての言語の重要性、苦手部分の迂回学習や指導時間の短縮ができること、複数の刺激を効果的なタイミングや場所や時間で正確に提示できる ICT 活用の有効性などが示されていた。また指導の途中でも子どもの反応に応じて介入方法を変更することや、単に特定の文字が読めるだけでなく読み方の方略を学ぶことで般化が促されることも示されていた。先行研究では学童期の子どもが研究対象となっていることが多かったため、中学部、高等部段階での指導効果について今後検討したい。

3. 学校教育における体幹の安定と今後の展望—四つ這い姿勢について考える—

◎本多克敏 ○深草武志／共同研究者 大内田裕(大阪教育大学 特別支援教育部門)

正しい姿勢での学習は、学習意欲や認知面の発達に効果的であることが知られている一方、発達障害の子どもたちの中に姿勢保持に困難さを示す子どもたちが一定数存在する。姿勢の不安定さは、学習のみならず生活面においても不利になることが想定されるため、このような子どもたちに対して体幹の安定を目指した四つ這い姿勢を取り入れた指導実践の可能性を明らかにした。学校教育では、幼稚園から中学校にかけて系統的に身体の動きを高める指導内容が設定されているものの、生活面において子どもたちが身体を動かす機会が減少していることが明らかとなった。また、四つ這い姿勢は体幹筋の強化のためにリハビリテーションやトレーニングに用いられる一方、学校教育においては十分に取り上げられていない現状が明らかとなったが、体づくり運動や雑巾掛け等、教育活動に四つ這い姿勢の要素が含まれており、四つ這い姿勢を用いた指導実践は良い姿勢で学習をするために必要な体幹の安定の向上に有効であることが示唆された。

4. 知的障害特別支援教育における手指の巧緻性向上を目指したアプローチ

◎大原健哲 ○花田知恵、川崎剛、竹内ゆりか、西川裕子、的場早紀、村山希世、保田洋幸／共同研究者 大内田裕(大阪教育大学 特別支援教育部門)

握力を向上する指導を行うことで手指の「不器用さ」が軽減するという仮説を立て、生徒たちの握力の変化と微細運動の変化について分析・検証を行う。介入前に握力測定と4種類の巧緻性検査を行った。介入は、週に3度の握力トレーニングを3週間実施である。介入後に握力測定と4種類の巧緻性検査を行い、握力と巧緻性の関係性を検証した。介入後の巧緻性検査の数値は、多くの生徒が数値を向上させることができた。しかし、握力測定では数値が向上しなかった生徒に加えて、数値が下がる生徒が多く見られるという予測できなかった結果となった。握力が下がった生徒が想定以上に多くいたことから、握力と巧緻性の間に関係性を見てとることができなかった。介入後に握力が伸びなかった理由を分析し、知的障害がある生徒たちの握力を向上させるための方法を探ることで、今後の握力と巧緻性の関係性の研究に繋げていく。

5. 知的障害特別支援学校美術科における対話型鑑賞の実践的研究

花田 知恵 / 共同研究者 今枝 史雄(大阪教育大学 特別支援教育部門)

研究協力者 吉原 和音(京都芸術大学アート・コミュニケーション研究センター 研究員)、古谷 晃一郎(アートコーディネーター／特定非営利活動法人 Be Creative 理事)

本研究は知的障害特別支援学校における「主体的・対話的で深い学び」に基づく対話型鑑賞の授業モデルの検討を目的とした。中学部美術科での対話型鑑賞における生徒の発言を「主体的な学びの発言」「対話的な学びの発言」「深い学びの発言」「その他の発言」の4つに分類し、それらの割合と共通する「問いかけ」を整理した。その結果、「問いかけ」から「主体的な学び」「対話的な学び」「深い学び」のつながりを捉えることができた。今後は、「主体的・対話的で深い学び」の鑑賞学習における学習評価の在り方について検討していきたい。

6. 知的障害特別支援学校におけるダンス指導モデルの構築に向けて

—自己意識および他者との相互作用における変化に着目して—

竹内ゆりか / 共同研究者 西山健 (大阪教育大学 特別支援教育部門)

学校教育でのダンスは自己表現やコミュニケーションを促す活動として期待されている。先行研究では現代的なリズムのダンスと創作ダンスの両方を学習教材として取り入れることが望ましいとされているが、実際には現代的なリズムのダンスが指導の中心となっている現状が見られる。本研究では、現代的なリズムのダンス、創作ダンスの両方を取り入れた実践を通して、自己表現やコミュニケーションの力を育むダンス指導モデルの構築に向けた検討を行うことを目的とした。具体的には、二つのダンスに加えてボディワークやゲームを取り入れた授業の動画記録から生徒の変化や行動を活動ごとに抽出し分析した。その結果、ボディワークは自己意識を、現代的なリズムのダンスは自己解放・集団意識を、ジェスチャーゲームは他者意識・相互作用の力を高める活動であり、創作ダンスはそれらの力を発揮させ、より高めていくものであることがわかった。これらの結果をもとに知的障害特別支援学校におけるダンス指導モデルを提案した。

7. 特別支援学校における美術の授業を通しての自己選択・自己決定の育成について2

辻 奈誠子 / 共同研究者 西山 健 (大阪教育大学 特別支援教育部門)

本研究の目的は、厚生労働省が提示する「障害福祉サービスの利用等に当たっての意思決定支援ガイドラインについて」を基に、知的障害のある子どもが安心して発言・自己決定できる環境づくりについての提言を行うことである。アドラー心理学の勇気づけるメッセージを用いた応用行動分析学の社会的称賛や、心理安定型支援を用いた話しやすい環境づくりについて検討し、美術の授業を通して使用する画材や課題等を選択する場面やプリント学習を通して授業や作業の見通しを持つことができる場面を設定すると同時に、生徒自らが自己選択・自己決定を行う機会を設けた。また、対象授業における自己決定ができるまでの過程やエ

ピソードをまとめ、辻 (2021) で提言した「自己決定ができるまでの流れ」を用いて、自己決定の成長の過程についての検証も行った。

8. 特別支援学校における自己効力感を高める現場実習のあり方についての考察

野崎 善之 / 共同研究者 早野 眞美 (大阪教育大学 特別支援教育部門)

本研究では、特別支援学校高等部において、生徒が希望する進路を選択し、社会的な自立を実現するために必要な資質・能力を在学中に獲得できるように新しいキャリア教育指導・支援プログラムの開発を目標として指導・支援方法について実践検討を行っている。本年度は、特別支援学校高等部において進路選択のための重要な取り組みとして設定されている現場実習について、その前後で生徒の自己効力感がどのように変化をするのか、2種類の質問紙を使用し、質的・量的に検証した。結果、実習を通して質的にも量的にも自己効力感を高めることができた生徒を確認することができた。この結果に基づいて、知的障害のある生徒が現場実習を通して自己効力感を獲得するためには、①実習期間内に自ら成長を実感できるような作業を行うこと。(遂行行動の達成)、②実習先事業所のスタッフが、生徒に対し肯定的な言葉掛けを継続して行い励ますこと(言語的説得)が効果的であると示唆された。

9. 知的障害特別支援学校高等部における卒業後を見据えた学びについて

—卒業生への生活状況調査を通して—

迫田 真喜 / 共同研究者 今枝 史雄 (大阪教育大学 特別支援教育部門)

本研究は、知的障害特別支援学校在籍生徒のうち、高等部卒業からその後の社会生活を送るうえで対人コミュニケーションに課題を持つ生徒がどのような進路先を選択し、またその前後においてどのような困難に向き合わなければならないかを分析し、今後の社会生活に役立てる最適な支援の方法について考察するものである。特に就労後の離職率にも着目し、在学中から各進路先とのミスマッチン

グを未然に防止することを一つの目的として研究に取り組んだ。研究手法として本校卒業生へアンケートと、インタビューを通じたヒアリングを数年に渡って継続実施することで、卒業生たちのライフステージに応じたニーズの変化や、進路先が求めるトレンドの移り変わり等についても明らかにしていく。また、それらを通じて卒業生の現状を把握し、必要に応じたアフターケアに役立てる。さらに、アンケート結果より得られたデータからフィードバックを行い、高等部教育課程の見直しに活用する。

10、知的障害特別支援学校音楽科における音の視覚イメージの形成と表現方法に関する一考察

松田 愛理子／共同研究者 大内田 裕（大阪教育大学 特別支援教育部門）

知的障害を有する児童生徒に対する音楽科教育において、「思いや意図」をもち児童生徒が「創意工夫」をした音楽表現ができるための指導方略を検討することを目的とし、本年度は、「鑑賞活動」に焦点を置き、生徒たちが、音楽を聴取しどのようにイメージし、それを表現するのかを実践検証した。

鑑賞時に、ワークシート課題に取り組み、音楽を聴取してイメージした内容を描画した。また身体での表現活動にも取り組んだ。教職員と生徒の結果の比較や、生徒の描画した内容を分類した。多様な表現方法を用いた実践を行い、それぞれの表現方法に対して課題は見られたものの、課題を通して生徒が自己内で感じた内容を表現しようとする様子がみられ、生徒の表現する力を把握するアセスメントとしての可能性も示唆された。

11、知的障害特別支援学校における学級規模ポジティブ行動支援の効果

◎下岡 花子 ○大河 竜介

共同研究者 庭山 和貴（大阪教育大学 大学院連合教職実践研究科）

本研究は、知的障害特別支援学校小学部1・2年生学級において、学級規模ポジティブ行動支援を実践し、その効果を検証することをめざした。1学期に児童と定めた学級目標をもとにポジティブ行動マトリクスを作成し、目標行動を決定した。目標行動は手繋ぎ移動すること、「エイエイオー」を言うこと、給食準備を一人ですること、係活動に取り組むことの4つを選定し、2学期に介入を実施した。目標行動に対して、担任間でそれぞれの介入方法を定め、児童の行動を得点化したりエピソード記録を収集したりした。介入期間中も経過を確かめながら、介入方法を担任間で相談・修正した。その結果、個人間の差はあったものの4つの目標行動どれもが増加し、長期休み後にもその姿の継続が見られた。他の児童と同じ介入では行動の得点に変化が現れにくさが見られた児童には、個別に環境を見直すことで変化が生じた。学級規模ポジティブ行動支援の効果として、記録をもとに日々の指導を振り返り、方法やめざす姿について合意形成しながら取り組んだことでチームティーチングが円滑に遂行され、さらに児童の行動変容に繋がったことが示唆された。